

正岡子規著「仰臥漫録」岩波文庫、岩波書店 1927年7月10日刊を読む

仰臥漫録

明治卅四年九月二日 雨 蒸暑むしあつし

庭前の景は棚たなに取付とりついてぶら下りたるもの  
夕顔二、三本瓢ふくべ二、三本糸瓜へちま四、五本夕顔  
とも瓢ともつかぬ巾きんちやくがた着形の者四つ五つ

おみなえしまつさかりけいとおみなえし  
女郎花真盛まげ雞頭尺けいとうより尺四、五寸のもの二十本ばかり許

夕顔の実をふくべとは昔かな  
夕貞へちまも糸瓜たなも同じこどし棚子たな同士  
夕貞の棚に糸瓜も下りけり  
鄙ひなの宿夕貞汁やどを食はされし  
右八月廿六日俳談会席上作  
夕顔の太り過ぎたり秋の風  
棚一つの夕貞ふくべへちまへちまなんど  
病床のながめ  
棚の糸瓜思ふ処へぶら下る  
試みに名をは巾着はちまきふくべかな  
取付て松にも一つふくべかな  
子を育つふくべを育つ如きかも  
雨の日や皆倒れたる女郎花おみなえし  
雨の日を夕貞の実のながめかな  
蝉せみなくや五尺に足らぬ庭の松  
糸瓜ぶらり夕顔だらり秋の風  
病間に糸瓜の匂など作りける  
野分のわき近く夕顔の実の太り哉かな  
湿気多く汗ばむ日なり秋の蠅はえ  
雞頭けいとうのまだいとけなき野分かな  
秋もはや塩煎餅しおせんべいに渋茶しぶちや哉

朝 粥四碗、はぜの佃煮、梅干砂糖つけ  
昼 粥四碗、鰹のさしみ一人前、南瓜一皿、佃煮  
夕 奈良茶飯四碗、なまり節煮て少し生にても 茄子一皿

この頃食ひ過ぎて食後いつも吐きかへす

二時過牛乳一合ココア交て

煎餅菓子パンなど十個ばかり

昼飯後梨二つ

夕飯後梨一つ

P7 ~ 11

九月二十日 曇 時々雨

朝 ぬく飯三碗 佃煮 なら漬

午 粥三碗 焼鴨三羽 キヤベージ なら漬 梨一つ 葡萄

間食 牛乳一合ココア入 菓子パン大小数個 塩煎餅

便通及繻帯取換

晩 与平鮓二つ三つ 粥二碗 まぐろのさしみ 煮茄子 なら漬 葡萄一房

夜 林檎二切 飴湯

十時半寝に就く

昨夜上野の梟 鳴く

『週報』募集俳句(題商)を閲す

『俳星』を見る 露月の日記あり その近状を知るに足る 我日記も露月に見せし

同雑誌牛 伴選天の句に

草に火を落して行くや虫 送 某

といふあり 趣なしといふに非ず月並調に近きを嫌ふ

格堂選天の句に

草に据ゑる五右衛門風呂や雁の声 某

といふあり 面白き句なり しかし格堂いまだ俳句の品格といふことを知らずと見えたり 但彼の

作る所

芋の葉に昨夜の雁の涙かな 格堂

松露掘つて山谷の廬を叩きけり 同

遥に俗流の上に出づ 侮るべからず

露月選地の句に

草花を見つめて鹿の憂寐かな 某

といふあり これ位初心な句を露月は得見わけざるにや 露月もと鈍根、長く工夫して漸く一条の

活路を得たる者しかもここに多少上慢の心起りて復一段の進歩を見ず 平凡の趣 微細の趣はいまだ  
全く解せざるが如し なほ三折を要す  
夕刻左千夫本所の与平鮓一折を携へて来る  
上野の森の梟しばし鳴いてすぐやむ  
虚子より『ホトトギス』先月分のとして十円送り来る  
律は理窟づめの女なり 同感同情のなき木石の如き女なり 義務的に病人を介抱することはすれど  
も同情的に病人を慰むることなし 病人の命ずることは何にてもすれども婉曲に諷したることなど  
は少しも分らず 例へば「団子が食ひたいな」と病人は連呼すれども彼はそれを聞きながら何とも感  
ぜぬなり 病人が食ひたいといへばもし同情のある者ならば直に買ふて来て食はしむべし 律に限  
つてそんなことはかつてなし 故にもし食ひたいと思うときは「団子買ふて来い」と直接に命令せざ  
るべからず 直接に命令すれば彼は決してこの命令に違背することなかるべし その理窟つばいこと  
言語道断なり 彼の同情なきは誰に対しても同じことなれどもただカナリヤに対してのみは眞の同情  
あるが如し 彼はカナリヤの籠の前にならば一時間にて二時間にてただ何もせず眺めて居るなり  
しかし病人の側には少しにても永く留まるを厭ふなり 時々同情といふことを説いて聞かすれど  
も同情のない者に同情の分るはずもなければ何の役にも立たず 不愉快なれどもあきらめるより外に  
致方もなきことなり

病人の息たえたえに秋の蚊帳  
病室に蚊帳の寒さや蚊の名残  
伊庭想太郎カ 秋の蚊の源左衛門と名乗り  
秋の蚊のよろよると来て人を刺す  
残る蚊や飄々として飛んで来る

P58 ~ 61

#### [コメント]

正岡子規晩年の四大随筆集の一つ。後世に遺せるものとしての著作として意識した力作。子規の  
生き方から学ぶことは大きい。

- 2010年1月4日 林明夫記 -